巻頭言

リハ・マインド

角田　亘
（国際医療福祉大学三田病院リハビリテーション科）

私は，リハ・マインドという語を口にすることを好まない．

リハビリテーション医学科ならではの独特な心得・視点・考え方，すなわちリハ・マインドを理解しておくことは，リハビリテーション医にとっておそらくは必須である．ただ私は，リハ・マインドという語が先走ることで生じうるいくつかの弊害を，老婆心と自覚しながらも危惧する．まずは「リハビリテーション医が誇ることができるのは，そのマインドしかないのか？」と，他分野の医療者たちから見下される危険がある．次いで「リハビリテーション医は，そのマインドさえもち合わせていれば，scientific な思考はあまり問われない」と誤解する若きリハビリテーション医が生まれてこないとは限らない．私は，リハビリテーション医なるものは，患者の障害のみならずその生活にまで焦点をあて，いかなる患者に対しても最良の management と support を提供できる specialist と理解している．すなわちリハビリテーション医は，リハビリテーション医学の specialist としての知識を備え，診療・治療技術をも習得する必要がある．よって，私は思う．今，私たちリハビリテーション医が行うべきは，自分たちが抱いているマインドを声高らかにアピールすることではなく，そのマインドに基づいて専門的な知識や技術を確実に培い，それらこそを明確なかたちで広く示していくことではなかろうか．

リハビリテーション医学講座をもたない大学医学部が少なからず存在し，先日まで全く別の診療科に勤務した医師が，リハビリテーション病院への就職に伴い突然に「自らはリハ医である」と名乗りだす現状が許される本邦では，リハ・マインドを徹底する必要があることも分かる．しかしながら，私たちリハビリテーション医はさらに高いステージを目指さねばならない．「熱いリハ」「戦うリハ」などとマインドを謳ったリハビリテーションのキャッチフレーズを目にするが，医療者たるものいかなる分野が専門であろうと，熱い思いで患者とともに病と闘うのは当然のことである．実際のところ，他の診療科では，何々科マインドなどという語を耳にすることがあまりない．おそらくそれは，他の診療科は，そのマインドを前面に訴える未熟なステージをすでに終えているからだ．私たちリハビリテーション医がマインドを強調する時代は，もはや終焉されるべき時にある．

加えると，リハ・マインドが，リサーチ活動を通じて，リハビリテーション医学の進歩・発展に昇華されることを私は期待する．患者にとってリハビリテーション医は，リハビリテーション医学の最高なる scientist でもあるべきだ．リハビリテーション医学の未来を決するのは，さらには障害をもつ人々の生活・人生に新たな希望を与えることができるのは，リハビリテーション医以外の誰でもない．リハビリテーション医学者として現代に生きる私たちは，次世代のリハビリテーション医たちに，私たちが世代を受け継いだ時と同じ初期条件を与えることは許されない．リハ・マインドを他人に説く時間に余りあるならば，ほんのひと時でもリサーチ活動に自らの身を捧げ，1 つの scientific な学会報告，1 本のささやかな医学論文でも世に示すべき，残すべきと私は思う．

新専門医制度の黎明期にあって，リハビリテーション医の specialty があらためて問われることは必至である．特に，将来の進路としてリハビリテーション医学科を眼中におく若き医師・医学生の目は，間違いなく厳しい．リハビリテーション医学の魅力を彼らに納得させるためには，リハ・マインドを強調するだけでは，全くもって不十分なはずだ．私たちリハビリテーション医が，いまや目を向け世に見せしめていくべきものは，something beyond the mind である．

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2016

閲覧情報: 国際医療福祉大学（附属三田病院） 51086-04　2016/04/18 14:21:06